

越境と躍動のフィールドワーク⑧ サステイナビリティの高い「自然保護」の方策を探る

笹岡正俊

財団法人自然環境研究センター研究員（環境人類学、インドネシア地域研究）

インドネシア東部マルク諸島セラム島。この島の内陸部に点在する農山村では、国によって保護されている「希少」野生動物の利用が地域の暮らしを支える上で重要な役割を果たしている。ここ数年来、筆者はそこをフィールドに、「保護の対象となっている野生動物の利用が、地域の人びとの暮らしにおいてどのような意味を持っているか」、また、「在来知」に基づくひとびとの営為は、そうした野生動物と人の関係の持続可能性にいかなる影響を与えているか」という二つの観点から、ローカルな文脈に埋め込まれた人と野生動物のかかわりあいを詳細に描き出す民族誌的研究を進めてきた。

筆者が調査をおこなってきたのはセラム島中部の内陸山地部に位置する一山村である。ここでは、クスクス——インドネシア東部島嶼部、メラネシアに生息する樹上棲有袋類——をはじめとする狩猟獣が地域住民の「食」を支える上で極めて重要な役割を果たしていた（図3）。また、オオバタンなどの希少野生オウムは、ペットとしてインドネシア国内外で需要があり、山地民のなかにはそれを生け捕りにして販売し、現金を得ている村びともいた（図4）。

コントロールを通じて、クスクスをはじめとする狩猟獣の利用に一定の秩序を構築したりもしている。しかしながら、野生動物との関係のサステイナビリティの向上に寄与しているとみられるそうした営為は、山地民社会が僻地に位置していることや山地民の歴史的周縁性を背景にして、これまでほとんど光が当てられてこなかった。

「生物多様性保全」や「希少野生生物保護」といったグローバルな価値がローカルな価値に介入してゆくプロセスとしての「自然保護」は、しばしば地域の人びとに、暮らし向きの悪化や価値観の否定などの受苦を強いてきた。改めて指摘するまでもなく、このような「自然保護」はサステイナブルなものではないはずだ。現行の政策のなかで「希少」とされ



図3 ハイロクスクス (*Phalanger orientalis*)。クスクスは山地民が捕獲・採取している動物性蛋白質の約5割を占める。国の法律で「保護動物」に指定され捕獲は全面的に禁止されている（2004年、筆者撮影）。



図4 オオバタン (*Cacatua moluccensis*)。山地民の一部は、ドリランの樹に糞を仕掛けてオオバタンを生け捕りし、販売している。クスクスと同様、国内法で「保護動物」に指定されておりその捕獲・飼育・販売が禁じられている。また、「ワシントン条約 (CITES)」の「付属書1」記載種（国際取引が原則的に禁止される種）でもある（2005年、筆者撮影）。

なくとも法規上は、その利用が全面禁止となっている。また、中央セラムの山地民はマルク諸島に設定された唯一の国立公園の周辺に暮らしており、狩猟獣やオウムを対象とした猟をしばしば公園内で「違法」におこなっている。このようにセラム島山地民は、「自然をまもる」という目的のために整備されたフォーマルな自然保護政策に背いて生計維持を図っている。とはいえ、山地民社会には、クスクスやオオバタンなどの野生動物と人との関係のサステイナビリティを高めることに寄与するような営為がまったく存在しないわけではない。

山地民は高いサゴヤシ依存と土地・植生への多様な半栽培的はたらきかけに特徴づけられるこの地域の「在来農業」を通じて、オオバタンをはじめとする野生動物と「緩やかな共生関係」を創り出していたり、また、超自然観と密接に結びついた森へのアクセス・

保護の対象となっている野生動物は、地域の人びとにどのように価値づけられ、また、そうした野生動物の利用は人びとの暮らしにおいてどのような意味や重要性を持っているのか、また在来知に基づく人びとの営為は、野生動物と人との関係の持続可能性にいかなる影響を与えているのか。それぞれの地域の实情に即した「自然保護」のあり方を模索・推進してゆくためには、可能な限り、人びとの生活世界に入り込みながら、そうした問いに対する答えを探る必要がある。そうした作業は、既存の学問の境界を飛び越えた、躍動感あふれる営みであるはずだ。

今後も、熱帯の僻地農山村を舞台に、そうした「越境と躍動のフィールドワーク」を実践することのなから、地域の人びとに受苦を強いることのない、サステイナビリティの高い「自然保護」の方策について探ってゆきたい。